

綺麗になったが、泳ぐこともできなければ、川岸を散歩することもできない。魚を釣ることもできないのである。ただ川が流れているだけである。上海も発展することが好ましいが、自然環境に人間が親しみ難い都市は建設して欲しくない。近代化を急ぎ過ぎて、大切なものを忘れて不便で不安定で人間味のない都市を建設しているのではないかと不安に思われてならない。

## 上海の都市構造の変化 ——浦東開発地区を訪ねて——

福島 義和

### はじめに

ロンドン、パリ、そしてニューヨーク。これらの都市は資本主義経済が高度に発展した産業国家の代表的な都市であると同時に世界都市 global city の代表でもある。しかし、1990年代になって第三世界のメガシティ化が加速するなか、特にアジアの都市が注目されている。21世紀にはアジアの台頭する都市が東京を追い越す日が来るのだろうか。

### 1. 中国のテイクオフへの戦略拠点；1,300万人の上海

農村や地方からの民工潮のために人口1,300万人余に急激に膨張した大都市上海は、単なる一発展途上国のメガシティからグローバルシティになりえるのだろうか。

2年前の中国画報<sup>(1)</sup>の長江流域報道シリーズ「建設と開発を速める長江経済ベルト地帯」のなかで、中国経済の態勢を次のように「曲った弓や長い矢」にたとえている。

「曲った弓」は経済特別区と沿海開放地区を、「長い矢」は、黄金水路の長江を、それぞれ指しているが、曲った弓を引いて矢を射てこそ中国という竜は、はじめて天に向けて飛翔するだろう。もし1970年代の末から1980年代の初めにかけて行った経済特別区の設立及び14の沿海都市の対外開放が、長年間にわたって閉鎖していた中国の世界に門戸を開いた探索や試みとすれば、1990年代に行った長江流域の開発・開放は中国経済が世界に向けて歩きだした重要な第一歩であり、この見地から言えば、後者は前者よりさらに重要である。



租界時代に「バンド」と呼ばれていた外灘は、対岸の浦東地区とともに「極東のウォール街」として復活するチャンスを持っている。＝福島団員撮影

つまり1990年4月に、李鵬首相がそれまで黄浦江に隔てられて開発が遅れていた浦東地区(Pudong)を、「第二の香港」にするため、21世紀の半ばまでかかる壮大なナショナルプロジェクトを打ち上げたのである。皮肉にも上海はおよそ150年前にはアヘン戦争の後始末の南京条約(1842年)で、条約港(上海市街区つまり浦西地区 Puxi)としてイギリスなどのヨーロッパ世界に開港された。その時点ですでに上海の中継貿易港としての価値は十分に評価されていたと考えられる。開港以来ほぼ100年間、半植民地的な都市として生き続けた上海には、その文化、生活、風俗物に物悲しい、それでいて匂いたつように妖美な、ほとんど架空めいた出来事の舞台にふさわしいものがあった<sup>②</sup>。それらが上海の大きな魅力であった。その当時(1930年代)の上海はアジア有数の都市として繁栄しており、はるかに東京以上に開かれた国際都市であった。黄浦江(Huangpu River)沿いの外灘(バンド The Bund)に1930年代に建築されたイギリス様式の建築群は、現在でも西欧による租界時代を想起させるに十分である。

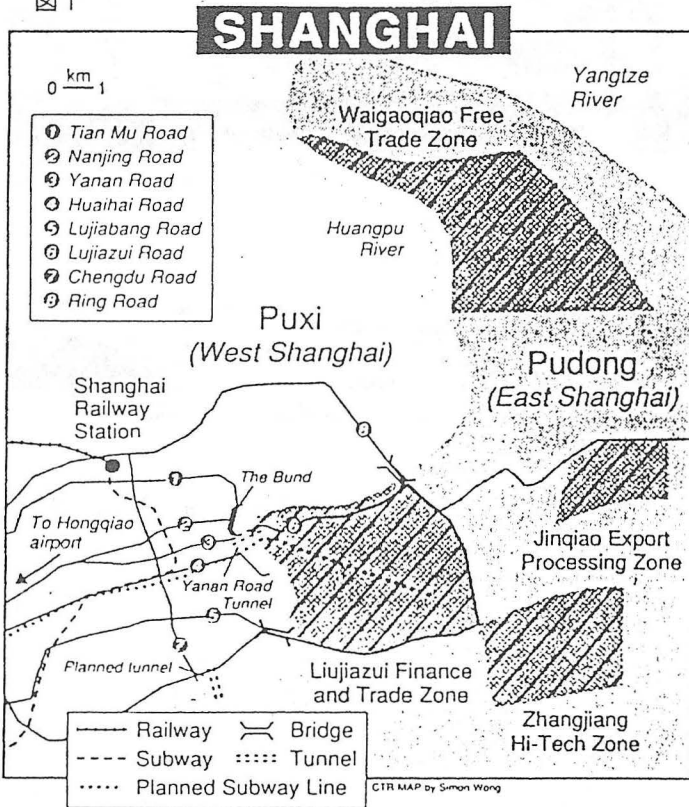
1949年の半植民地的性格からの開放以降、再び1990年代に入り、日本を含めたアジアや欧米の国々が社会主義市場経済を基本政策とする国家の最大の経済都市に向かって活発に活動を始めた。停滞感漂う1980年代の上海とは異なった様相である。つまり80年代に展開された広東省や福建省の経済特区にみられた輸出主導型の沿海経済発展戦略だけでは、アジアの発

展途上国の大国をテイクオフさせることは困難である。

## 2. 「東西格差」の縮小を図るナショナルプロジェクト；浦東開発

現在、中国は80年代から90年代初頭の高度成長路線の歪みを是正する調整期に入っている。つまりポスト鄧小平時代は社会主義市場経済の点検の時期である。

図1



(出典) China Trade Report, March 1995.

地方政府や企業に委譲した結果、80年代の沿海経済発展政策が実現したといえる。改革・開放依頼16年余りの年月が上記の①の関係を地方分権化あるいは地方保護主義化の方向に向かわせたのである。②・③の地域間格差や、④の所得格差の是正問題は、ポスト鄧小平の中央政府の抱える重要な政治的問題である。現在、90年代にスタートした浦東開発が、財政の自主利用が認められたことで、浦東のインフラ投資だけでも90年代に2,000億元を越える規模で実施されると予測されているが<sup>34)</sup>、さらに注目しなければならないのは、この開発が外資導入<sup>35)</sup>によって上海市の経済活性化、さらには長江流域の各内陸都市との経済関係を強化す

そしてその歪みは、次の5大関係<sup>36)</sup>の中に頻繁に散見される。

- ① 中央政府と地方政府の関係
- ② 東部（沿海）と中西部（内陸）地域の関係
- ③ 豊かな都市と貧しい農村の関係
- ④ 高所得と低所得者の関係
- ⑤ 党・政府高級幹部と一般庶民の関係

これらの関係に通底するものは、「分配の不正」問題である。市場経済政策を採用する中央政府が、その権限を徐々に



総投資額が100億ドルを上回るなか、開発ラッシュでわく浦東開発区＝福島団員撮影

る経済圏を形成しながら（「T字型同時発展論」と呼ぶ）、将来上海市を経済、金融、貿易のナショナルセンターとして発展できるかどうかである。

具体的に浦東開発計画では、350km<sup>2</sup>の浦東新区（図1参照）内に4つの開発先行区（外高橋自由貿易区 Waigaoqiao Free Trade Zone、金橋輸出加工区 Jinqiao Export Processing Zone、陸家嘴金融貿易区 Liujiazui Finance and Trade Zone、張江ハイテク区 Zhangjiang Hi-Tech Zone）を建設し（写真）、特に外向型企業の誘致のために上海人民政府は、輸出主導型の優秀企業やインフラ部門への投資に対し税優遇措置を採用したり、金融、証券、小売流通などの第三次産業部門への投資を許可している<sup>86</sup>。

このように見てくると、1990年から40年にわたる浦東開発計画は明らかに「広大な後背地を抱えた第二の香港」を目標にした外向型発展の典型<sup>87</sup>であり、深圳のような経済特区型の輸出主導型の開発とは異なる。将来上海市が第三次産業の発達により、産業構造の高度化を経験することになれば、メガシティからグローバルシティへの飛躍も可能だろう。もちろん飛躍のための必要条件はインフラ整備と「三資企業」（合資、合作、外国独資企業の外資系企業の3形態）の発展である。そして浦東新区の発展のエネルギーである「三資企業」を地元中小企業だけでも5千余社ある下請け企業が支えている<sup>88</sup>。

### 3. 21世紀の国際経済都市——上海のモデル都市は東京！？

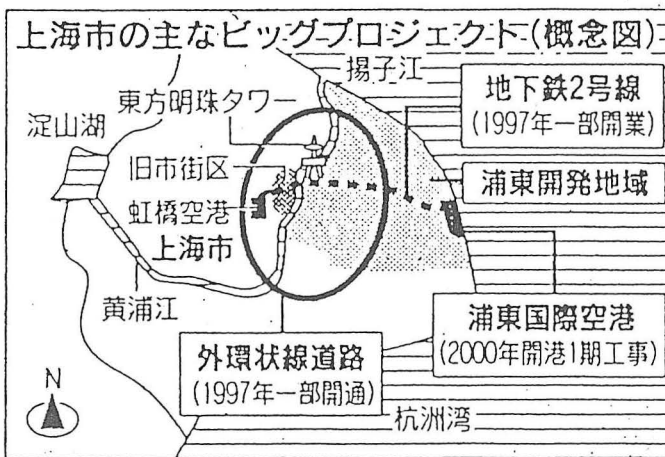
中央政府が地方の巨大大事業の抑制方針を打ち出す中で、上海市は97年の香港返還を見据え、国際経済都市のインフラ整備を急ピッチで進めている<sup>(1)</sup>。図2のように、新国際空港の建設、その空港と既存の虹橋空港を結び市内を東西に貫く地下鉄2号線の着工、さらに上海市郊外を一周する外環状線道路の建設など総額30億ドル以上の10大プロジェクトを、95年度の優先事業として認定している。事業の実施は、事業会社が建設から運営まで一貫して手掛けるBOT（ビルド・オペレート・トランスファー）方式や合弁事業などの外資導入が主体である。

上海市の副市長、浦東新区管理委員会主任の趙啓正氏は「浦東開発の明るい見通し<sup>(2)</sup>」)として、「2、3年たってから浦東を訪れたら、あなたはその都市建築がフランクフルト、ロンドン、ニューヨークに似ているとを感じるだろう。もし十年以後に訪れたら、市街区はすでにでき上がり、浦東の経済はテイクオフしているだろう」と語っている。しかし最近（日経、1995年7月7日付）、上海市長の徐匡迪氏は「上海には工業地帯も多く、第三次産業中心の香港型は上海に適さない」と指摘しながら、「工業地帯を抱えた第二次産業と金融機能の結びついた『東京型』が上海のモデル都市に最適である」としている。

確かに92年以降の、日本企業を含めた外資ラッシュを見ていると、前者の副市長の言葉には説得力があるが、グローバルシティの仲間入りや経済のテイクオフの前に上海人民政府がやらなければならないことは、第二次産業の外向型発展と第三次産業の育成である。

上海の都市構造の急激な変化は、開発のスピードについていけない数多くの人々を巻き込

図2



みながら、改革・開放の開発の中に新たな貧困を生み出している。既述した5大関係の健全な維持と、分配の公平さが実現された社会こそ、社会主義市場経済の最終的な目標であろう。鄧小平の思想もそれに近いものだろう。

(1) 中国画報 1993年11月  
通巻 502号 24～27頁

(2) 巖谷國士 (1992) 『アジ

(出典) 日本経済新聞 1995年5月1日付

アの不思議な町』筑摩書房 60～70頁

- (3) 日本経済新聞, 1995年3月31日付
- (4) 酒井仁司(1995) 中国の有望成長沿海地域 NOMURA SEARCH Vol.16 No.2 36～39頁
- (5) 浦東地区への海外直接投資(契約ベース)は以下の通りである。

1990年4月～12月	1,200万ドル
1991年	1億2,800万ドル
1992年	12億9,000万ドル
1993年	17億3,000万ドル
1994年	26億2,000万ドル

(出典) 西村哲也(1995)「中国の“東西格差を縮められるか 上海浦東開発」  
世界画報(6月13日)

- (6) 加々美光行(1943)『市場経済化する中国』日本改送出版協会 219頁
- (7) 中国の外向型発展に関する理論的展望は、次のものが参考になる。  
宇野重昭・鶴見和子(1994)『内発的発展と外向型発展——現代中国における交錯——』東京大学出版会 305頁
- (8) 長趙啓正(1995)「浦東開発の明るい見通し」北京週報 No.18 12～16頁
- (9) 日本経済新聞, 1995年5月1日付
- (10) 前掲 8)

## 天津市第二棉紡織廠を見学して

加藤 幸三郎

### はじめに

3月17日, 中国企業管理協会対外連絡部郎副主任の案内で団員有志8名と武清(楊村)經由(天津企業管理協会の案内者と合流)で天津市に入った私たちは, 有名な天津・南開両大学を過ぎ, 第一棉紡織廠に接したレストラン(同廠旧事務所)二階で, 張華国天津企業管理協会常務副会長らの招待宴に列席した。張氏は最近全人代委員を交替されたとのこと, 後述するように, 以前我々が採集してきた戦前期の旧鐘紡糸の上海絹糸紡績公大大六廠(現在, 第二棉紡織廠)関係資料を手渡ししながら, 幸運にも, 私の問題関心の一端を述べる事ができた。